

生テハ終ニシヌテフ事ノミゾ定ナキ世ニ定アリケル、其後又島ヨリ船ニ移乘、遙ノ沖ニ漕出
給ス、○中念佛高ク唱給、光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨ト誦シ給ヒツ、海ニゾ入給ニケ
ル、與三兵衛入道、石童丸モ、同連テ入ニケリ、

〔吾妻鏡四〕元曆二年○文治元年三月廿四日丁未、於長門國赤間關壇浦源上、源平相逢、各隔三町、糟向舟

船○中及午、剋平氏終敗傾、二品禪尼持寶劔、按察局奉抱先帝安徳春、共以没海底、建禮門院藤重入

水御之處、渡部黨源五馬允以熊手奉取之、按察局同存命、但先帝終不令浮御若宮今上者御存命云

云、前中納言教盛號入水、前參議經盛出戰場、至陸地出家、立還又沈波底、新三位中將資盛前少將有

盛朝臣等同没水○下

〔檢使心得帳〕水死見分之事

一死體を水中江しづめば、水を不吞故、總身腫れ不申候、いきかよふものを水中江しづめ候得者、

總身はれ申候、

〔近世奇跡考〕成瀬川土左衛門

享保九年午六月、深川八幡社地の相撲の番附を見しに、成瀬川土左衛門奥州産前頭のはじめにあ

り、案るに、江戸の方言に、溺死の者を土左衛門と云は、成瀬川肥大の者ゆゑに、水死して渾身膨ふ

とりたるを、土左衛門の如しと、戯いひしが、つひに方言となりしと云、

〔日本書紀三〕戊午年八月乙未、天皇使徵兄猾及弟猾者○中兄猾獲罪○罪下原有兄於天、事無所

辭、乃自蹈機而壓死ヲフハレシメ

〔續日本紀十一〕天平六年四月戊戌、地大震、壞天下百姓廬舍、壓死者多、

〔續日本紀十五〕天平十六年五月庚戌、肥後國○國下恐雷雨地震○中山崩二百八十餘所、壓死人四

十餘人、並加賑恤、

壓死